

宿屋入道と宿屋光則

宮 崎 英 修

一、宿屋氏の読みについて

宿谷入道は日蓮聖人が立正安国論を最明寺時頼に献進した時の取次者としてはじめて幕閣の中で関係をもった人である。聖人はこの人を普通宿屋（宿谷）入道とかかかっているが、他に宿谷禪門^①、宿屋左衛門入道（定P四二五）と記されたもの、また屋戸野入道^②、夜戸野入道とも記されている。宿谷入道は周知の如く最明寺時頼の重臣で、時頼臨終の時は南部次郎実光（実長の兄）武田五郎三郎政綱・工藤光泰等七人と共に最後を看とったいわゆる祇候人といわれる七腹臣の一人で、入道して最信と号した。「吾妻鏡」弘長三年十一月十九日条に「宿屋左衛門尉^{法名}最信」とあるがその実名は記されていない。叡尊の「関東往還記」には弘長二年七月十六日に「最明寺禪門使を進て云^{宿屋左衛門}来ル十八日斉戒ヲ受ケント欲ス」とある。これにもまた実名は記されていないし、その姓の呼び方も明らかでない、しかるに前掲遺文によれば「やどや」とあるのを見れば、当時の人は宿屋（やどや）と呼んでいたことは明白である。

埼玉県入間郡毛呂山町には平安朝後期に宿谷荘が開発されたようで、ここから宿谷氏が出て幕府御家人となつて活躍した。現在毛呂山町大字宿谷をはじめ大谷木・葛貫・沢田等の各地に宿谷氏の子孫が現存している。この一族及び地名は「しゅくや」と呼んで「やどや」とはいわない。昭和五十年のころ毛呂山町史編纂委員長村本達郎氏（埼玉大

学名基督教)より「宿谷」の読み方について問合せをうけたことがある。「しゆくや」か「やどや」かどちらかという間で、私はこれに対し日蓮聖人が「やどや」といわれていたことは真蹟の御書に確認があるから「やどや」と読むべきであろうと返事申しあげたことがある。しかし他方、南北朝期のころには成立していたであろうと考えられる「承久記」には「宿屋次郎」に「すくや」と振仮名があり、江戸初期に刊行された「承久軍物語」(群書類従本)には「しゆくや次郎」とのせられ、姓氏家系大辞典には「宿谷」(やどや)項に「しゆくや条に詳なり」として「しゆくや」を本姓にあつかっている。さて、宿谷を宿屋と通音に従って谷(や)を屋(や)と書くことは鎌倉時代には普通であったことはよく知られているところで、例えば聖人も富木を土木また宮城等と通音によって書かれていることによっても知られるから宿谷と宿屋の文字違いは問題にならぬことである。吾妻鏡には「宿屋」とあるが入間郡の地名は「宿谷」である。宿谷の本貫は「しゆくや」と読むならば宿谷入道は「しゆくや入道」と読むべきではなからうか、承久記も「すくや」と読み、また「しゆくや」とするのはその証ではないか。しかるに聖人は明らかに「屋戸野」等と書かれているから当時の鎌倉人士は「やどや」と読んでいたことは確実で、「しゆくや」等の読みは本貫の宿谷荘ではしかく呼んだかも知れぬが鎌倉期のこの頃は「やどや」が一般的な呼称であったといえよう。さて、この相違について村本氏は

立正安国論を北条時頼に上進する事を宿谷最信に依頼した時、すなわち三十九歳當時の日蓮は、宿屋を「やどや」と読んだことの証明である。その時宿屋最信は奉行職にあったから取次ぎを頼んだまでで、日蓮は宿屋氏その人は知らなかったであろう。現代においても、宿屋を何と読むかと聞けば、十人が十人とも「やどや」と読むと答えるであろう。これを「しゆくや」と読む人は、宿屋氏があるのを知っていれば別であるが、普通にはないであろう。

宿屋を日蓮が「やどや」と読んだのは当然である。しかし、その後ずっと日蓮は宿谷氏[・]というものが正しいことを知らなかったであろうが、恐らく何かの機会に奉行宿谷氏の正しい読み方を知ったに違いない、……日蓮臨終に程近いころの書「波木井殿御書」に「立正安国論を作り宿谷の禪門を使として」とかいている。この時「宿谷」と正しく書いているのは、その後の日蓮が宿谷が正しいことを知ったからであろう。⁽⁴⁾

と会通されている。聖人が「やどや」と読まれたのは誤読ではないかとの説であるが、聖人は十六出家是聖房と名乗られてから遺文の諸所にのべられているように鎌倉、京、叡山、高野山等の寺々をたずねて諸宗の奥義をさぐり三十二歳、建長四年（一二五二）の春清澄に帰られ、その間、京都の重要な公家・諸山の日記や文書を見、その諸家文書に通じておられたことは例えば祈禱抄、報恩抄等を見れば充分に知ることができる。鎌倉の事情についても直ちに調査されたであろうし、富木入道はじめ大田、金原氏一族の入信、これには千葉一族の人々も加わっているようであるが、建長五年ごろより正嘉・正元（一二五九）に至る六、七年には幕閣、要人について充分な知識をこれらの人々から待られたことと思われる。宿屋入道最信が時頼の腹臣、奏者であることは世間の周知の事であるから充分に知りつくされ、また安国論献進以前に入道にあり、その手引きによって時頼に謁し禅宗念仏の謬義たる所以を奏し、のち安国論を献ぜられているのであるから宿屋入道は「やどや」入道という位のことは当然熟知されていることである。ところが村本氏は聖人が宿屋とかかれたのは「宿谷（しゅくや）」というものが正しいことを知らなかったであろうか、恐らく何かの機会に奉行宿谷氏の正しい読み方を知ったにちがいない」と推測されているがこの考察は当を待たものではない。また正しい読み方を知ったと理解する証を「宿谷」と書いたことによって推定されるが、これまた妥当でない。文永五年安国論副狀に「宿谷入道」（P四二一）、同年安国論御勘由来に「屋戸野入道」（P四二二）、

文永六年安國論奥書に「宿谷禪門」(P四四三)、文永八年龍口の刑の前、一昨日御書に「宿屋入道」(P五〇二)と宿屋と宿谷を混用し、それ以後も宿屋と書かれるのが一般的であるから、宿谷と宿屋は通音に従ったもので宿屋を「やどや」と読み、宿谷とあれば「しゆくや」と読んだことになるとすれば吾妻鏡が宿屋次郎、宿屋左衛門尉と記し、叙尊が宿屋左衛門尉と書き留めているのは、当時の人々はみな「やどや」と読んだという証明になるものということになる。而して「承久記」が「すくや」と振仮名を付けたというのは後世の人の付けた読みであらうし、「承久軍物語」が「しゆくや」と仮名書きにしたのは「すくや」の読みを同種の読みである「しゆくや」としたにすぎないから承久記等の読み方をもって鎌倉時代の読み方を類推するのは總当ではない。近刊の吾妻鏡人名索引が宿屋をもって「す」の項に入れ「すくや」と読んだのは承久記の振片名に振仮名に従ったであらうが、それよりも確実な根本資料である「屋戸野」の読みに従うべきであらう。

二、最信と光則

この両者の関係については従来同一人物であると考えられていたが、かつて影山博士が棲神三三号で「宗門史上二三の問題について」と題し宿屋・富木・身延日進について究明されたことがある。この時、宿屋最信と光則は別人にして父子であることを光則寺寺伝と光則寺横山仁秀師(現住邦雄師の師範)が発見された宿屋系図によって証明されたがその後、日蓮教団全史「聖人檀越の一部の人物について」においてこの説を更に敷衍した。即ち宿屋入道は永仁元年(一二九三)聖人滅後十三年にして没した人であり、光則はこれより三十三年後、正中二年(一三二五)に没し

ている。元来宿屋入道の実名は前述の如く当時の文書類に見えぬ所……最信を以って光則とするのは安国院日諱が貞享四年（一六八七）から筆を起した「録内啓蒙」に「新編鎌倉志」を引いたのが初見である。即ち『鎌倉志五云、光則寺は行時山と号す、大仏へ行道左にあり、此所を宿屋ともいふ、相伝う、平時頼の家臣宿屋左衛門光則入道西信が宅地なりと、昔、日蓮龍口にて首の座に及ぶ時、弟子日朗・日心（進）二人、檀那四条金吾父子四人、安国寺にて召捕えて光則に預け給ひ土の牢に入らる、日蓮不思議の奇瑞有て害を免る。光則信を起し宅地に草庵を結び日朗を開山祖とす、光則が父の名を行時という故に父の名を山号とし我名を寺号とす』と、鎌倉志は貞享二年の新刊書であるにも拘わらず日諱は日向の配所にあつて早くもこれを購入している。その諸書探求の熱意と成果は瞠目するに足りよう。これはさておき、この啓蒙所引の説を智寂日省の「本化別頭高祖伝」、六牙日潮の「本化別頭仏祖統紀」がとりあげて「宿屋光則入道最信」とした。啓蒙と別統紀の高い信用と流布が最信は光則の法号であることを決定づけ、これが一般に知られて通説となつたものであらうと。

さて村本達朗氏は前掲毛呂山町史に宿屋氏の家系・事蹟、ことに最信と光則の関係を糺明され、また宿屋氏の盛衰を述べられたが、いま同書に取上げられた宿谷氏家系の諸本を紹介してみたい。いうまでもなくこの諸系譜は従来一般に知られていなかったものであるが、村本氏の史料探訪によつて発見されたものでこれ等諸本によつて最信と光則の關係は寺伝の如く父子の統柄にあることを決定づけることができる。

光則寺寺伝は最信と光則は父子であるといひ、同寺先住仁秀上人が埼玉県比企郡の某所より発見入手した系図で、同人關係の所は

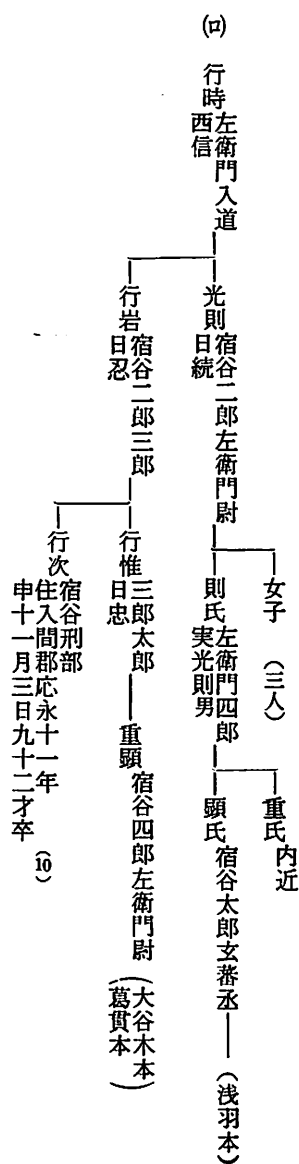
行時 左衛門尉
從五位下

奉行職三十有餘、永仁元年四月六日寂去
弘安五年十一月罷職遁世、入道西信

光則 二郎左衛門尉

永仁五年奉行就職
正中二年入道

(39)



以上紹介した系図で問題とするのは吾妻鏡に宿屋左衛門尉法名最信とある人物は、従来一般には宿谷光則のことであるとしているが、実は行時の事である。そして行時と光則の続柄は父子であることは確かようだが、行岩は光則の子とするのと、行時の子で光則の弟とする両説があつて疑問があるが、いまこれをおいて葛貫本によつて行時と光則の記録を見ると

行時 左衛門尉入道西信、従五位下ヲ賜フ。奉行職三十年有余、宗尊將軍家建長四年鎌倉御下向之砌り御迎仕リテ参洛、供奉ノ御役勤ム、文応元年七月日進上人ノ以頼、安国論ヲ最明寺殿ニ執達シ奉ル、行時兼テヨリ厚ク上人ニ帰依ス、身若クシテ最明寺殿ニ願ヒ申スノ間入道免許サレ西信ト号ス云々、文永中上人御法難、西信苦辛一通リナラズ、此ニ名越草庵ニ於テ修法ノ弟子檀那六人共、土牢ニ掬メ入レ警固云々、弘安辛午年十一月寅日奉行職コレヲ罷ラレ専ラ遁世ヲ事トシ訖ヌ、永仁元年巳四月六日入道寂去、

光則 宿谷二郎左衛門尉、従五位下、惟康將軍幕下、御世年初十有七召出サル。正応之初メ左近將監殿ニ従ヒ南方

ニ役ス、永仁五丁酉年五月鎌倉表ニ帰リ後奉行職、正中二年入道トナリ剃髪、鎌倉宿屋館ニ草庵ヲ結び、日朗ヲ開山トナシ光則寺ヲ立テ渴仰スルコト日々々々盛ナリ更ニ懈怠ナシ、本ヨリ信心厚キ事ユエ父入道ノ御名ヲ山号トシ我名ヲ寺号ト称スルノミ云々、自之法名日統ハ日朗上人定メラル云々

次に大谷木本は

行時 宿屋左衛門尉入道、從五位下、暦仁元戊戌年鎌倉將軍頼經上洛之時供奉シ最明寺時頼入道ニ從フ、其後頼綱

公ニ從フ、其後親王家宗尊親王関東下向ノ時ニ供奉ス

光則 宿谷二郎左衛門尉、從五位下、惟康親王幕下、正中二年將軍薨シ入道トナル。

とある。次の浅羽本はこの二本とは全く別のもので前の(四)の系図に示した如く行時―光則と次第しているが、宿谷行弘の叔父に当る惟親の行状を記して

四郎 將軍頼經公、惟康親王三代ノ將軍奉仕ス……弘長三癸亥十一月十九日(時頼臨終の時のこと吾妻鏡の抜粹)

文永八辛未九月十二日、日蓮滝口刎首ノ時、弟子日朗・日進并檀那四条金吾父子合テ四人、安国寺ニオイテ召取光則コレヲ預ル。屋敷内ニ土牢ヲ構ヘコレヲ押込、日蓮奇瑞アリテ害ヲ免ル、仍テ光則信ヲ起シ日蓮宗トナリ、茅屋ヲ転ジテ寺トナシ、日朗ヲ叶テ開祖トナシ行時山光則寺ト号ス、十一月四日卒

村本氏はこれに註してこれは惟親なる人物のことでなく行時か光則のことにように思われ、始めは行時のようで、あとの部分は光則のここのようだが、或は行時・光則のことを吾妻鏡や当時の通説をとり入れて書いたものであるう、なお文永八年は光則は九歳であるⁿ。この記事は、吾妻鏡と鎌倉志を引用したものである。同氏が蒐集された宿谷氏諸家譜は、行時・光則の關係と、それ以降の宿谷氏諸流が武蔵入間郡宿谷莊を中心に形成される様態と盛衰を示

すために抜粋乃至摘録されたもので全貌を知ることのできぬ恨みはあるが、元来は毛呂山町史上の雄族宿谷氏を叙述するのが目的であつて資料公開のためのものでないから止むを得ないであらう。しかし最信と光則が父子であることを如上の三本の系譜によって示し更に光則寺の寺伝と光則寺の宿屋系譜を裏書する事蹟をのせている。

三、行時最信と光則日統

さきにのべた如く、宿屋最信の実名は当時の記録、すなわち吾妻鏡、関東往還記、日蓮聖人遺文にはのせられていない。而して宿屋最信の名は宗門の文献には宿屋左衛門入道、宿谷禅門等と遺文の記述に従つており、室町中期の円明日澄は註画讃に「鎌倉ノ奉行宿屋ノ左衛門入道法名西信」と法号を付しているが実名は記していない（西信は最信の通音である）。これが江戸中期に限になると前記の如く宿屋入道最信、諱は光則と書かれるようになって宗門では一般化し、これが通説となり、最近の「全訳 吾妻鏡」も宿屋左衛門尉に光則と割註を加えているのである。行時と光則の続柄が父子であることは問題のないところであるが、一応その事歴を略示すれば

行時 左衛門尉入道最信、弘安五年十一月職をしりぞぎ、永仁元年（一二九三）四月六日卒

光則 二郎左衛門尉、永仁五年奉行職、正中二年（一三二五）入道、日朗上人より日統の法号を受け、宿屋邸を転じて寺とす。父行時の名を以て行時山と号とし、自身の名をもつて光則寺とし日朗を開山と仰いだ。

光則の没年は記されていないが村本氏は光則の没年は元弘二年四月十三日、七十歳と推定される。大谷木本の葛貫本によれば

行時——光則——行岩

——行岩——行惟——重顯——儀重——行貞——重行

と次第するが、いま諸系図を勘案すると

行岩 嘉元元年（一二〇三）七月十六日卒 日忍

行惟 正慶二年（一二三三）五月廿二日 日忠

重顯 四郎右衛門尉、延文四年（一二五九）官方に従い大功を立つ

儀重 応永六年（一三九九）奥州征討に従い九月朔日死 享年五十二

行貞 新左衛門 応永三十五年（一四二八）正月二十九日六十歳卒

重行 長禄二年（一四五八）四月十三日七十二歳卒

とある。而してこの重行について系譜は

智勇兼備、希代ノ武將ト雖モ不遇也、武勇ハ毫モ先祖ニ劣ラズ、左衛門尉殿ノ卒去者四月十三日也、彼ハ元弘二年、此ハ長禄二年、行年彼ハ七十歳、此ハ七十二歳、少ク異ナレドモ同日甚不思議也、サレバ世人大ニ驚ク

とある。村氏は左衛門尉の名とその先祖の没年月を参照して没年の明らかでない左衛門尉は光則であると推定し、

光則の卒年を元弘二年（一二三二）四月十三日、行年七十歳とした。¹²⁾

これによれば光則は弘長三年（一二六三）の生れで聖人竜口法難の時は八歳である。また前掲の葛貫本の光則伝によれば十六歳の時將軍惟康親王に召出されたとあるが、十六歳は弘安元年で惟康將軍就職十五年目のことで將軍は正応二年（一二八九）職をやめ久明親王が將軍となる。光則は前掲の伝には正応のはじめ左近將監に従い上洛して六波羅南方に勤役したとあるが、これは惟康將軍罷職によって幕下をはなれ京都勤役に転じたもので年二十七歳、事歴と年令と相応し不審はない。かくて永仁五年（一二九七）三十五歳、鎌倉に帰り奉行職となり、正中二年（一二二五）

六十三歳入道して日朗より日統の名を授けられ、館を寺とし日朗を開山とし行時山光則寺と号したという。但し正中二年入道して日統と法名を授けられたとするが、日朗は元応二年（一三二〇）七十六歳を以て入寂しており、これは正中二年より六年前のことである。日統の法号授与は日朗在世のころで当時の慣例によれば三十歳前後で入道しているから、六十三歳入道というのは、光則寺を建立し寺主となったことをいうのであろう。なお寺伝によれば初祖を宗祖、二祖日進、これは文永八年竜口法難の時、日朗と共に入牢した日進¹³で、日統は自から三世に列している。

以上、宿屋氏諸家譜によつて行時・光則の関係を更に明確にすることができたのは村本達郎氏の辛勞繹尋によるもので深く『毛呂山町史』に深い謝意を表するものである。

〔註〕

- (1) (真蹟) 安国論奥書 P 四四三
- (2) (真蹟) 安国論御勘由來 P 四二二
- (3) (真蹟) 本文は「付夜□□入道・奏進最明寺」と御勘由來と同趣で内容が少しく詳細である。夜と入道の間は二字磨損しているが夜戸野「入道」と欠字を補足し得ることは当然である。
- (4) 毛呂山町史 昭和五十三年一月刊 宿谷氏 P 一二二
- (5) 法門可申抄 P 四五五
撰時抄 P 一〇五三
- (6) 吉川弘文館 全訳吾妻鏡 第五卷 P 五一二
吾妻鏡人名索引 P 四九八
- (7) 本化別頭高祖伝上「宿屋入道西信、諱ハ光則」 日蓮聖人伝全集 P 二〇
本化別頭仏祖統紀(別頭統紀) P 九四
- (8) 棲神三十二号 P 三三
日蓮教団全史 P 三六

- (9) 毛呂山町史 P 一二一
- (10) 同書 P 一三三
- (11) 同書 P 一二七
- (12) 同書 P 一四三
- (13) この日進は身延三世ではない、身延日進は文永八年（一二七一）の生れである。（日進筆玄義見聞集、身延山蔵）